

近世大坂における出版文化と人的交流 [全文の要約]

著者	松本 望
発行年	2015-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第555号
URL	http://doi.org/10.32286/00000345

博士論文要旨

文学研究科史学専攻 日本近世近代史
02D2304 松本 望

本論文は、近世大坂で活況を呈した出版文化の影響を受けて、作者・書肆・読者がどのように行動し、交流するのかを明らかにしようとするものである。

日本の出版史において近世は、整版印刷の登場により大量印刷が可能となり、商業出版が成立した画期となっている。大坂では新産業として多くの本屋が誕生するとともに、無数の出版物が世に出た。それに伴い、出版権を侵害する重板・類板事件が多発し、その取り締まりを行うため本屋は本屋仲間を結成し、享保8年(1723)12月23日、京都・江戸に次いで幕府による公認を受けた。

この本屋仲間に関する史料が現在まで残り、大阪府立中之島図書館によって『大坂本屋仲間記録』としてまとめられたため、これをもとに近世大坂の出版業界に関する研究が進展した。

つまり本の制作から流通にいたるまでの出版機構に関わる研究が蓄積されてきたが、1990年代に入って、読者側に焦点を当てた研究が登場する。元禄・享保期の大阪周辺村落・在郷町の上層農民・庄屋層の日記や蔵書目録から彼らの読書傾向を分析した横田冬彦氏、文書とともに書籍も史料として活用する「書籍史料論」を提唱した藤實久美子氏、書物一点一点について内容・思想分析を行い、その思想性・政治性を明らかにすることを主張した若尾政希氏らの研究が挙げられる。

以上の先行研究を受けて、本論文は近世大坂の漢学塾や文人社会を主な研究対象とし、そこで制作されていた書物を検討する。その際、書物の制作様式—写本・私家版(家塾版)・公刊本—や、書き込み等、書誌を精査する。論題の「出版文化」は、本屋仲間による審査を受けた公刊本だけではなく、写本や私家版をも含んでいる。

また論題の「人的交流」に関わって、公刊本は不特定多数の読者に対して、等しく知識・教養を持つことを促す。一方写本や私家版は読者を限定し、交流の深化を促す。漢学塾が制作した写本や家塾版は、儒者から門人に対する講釈の場で使用され、閉鎖的な交流をもたらすものと思われる。そして写本・私家版(家塾版)・公刊本の各々を制作し、あるいは制作様式を変えるに際しては、作者・書肆が強く関わる。つまり書物の制作様式と作者・書肆・読者の動向は、密接に関係する。

本論文の特徴は、不特定多数の読者を対象とした公刊本だけでなく、特に漢学塾が制作し読者が限定される写本や私家版を検討することにより、写本文化と刊本文化が両立した大坂で、各々の文化がもたらした交流について明らかにするところにある。

ここで本論文の構成と内容について触れる。本論文は次の6章より構成される。

第1章 近世大坂新町遊廓と遊女名寄

—『大坂新町遊女名譜つましるし』の改板をめぐって—

- 第2章 茨田家に残る大塩中斎著書の分析
- 第3章 天保期大坂代官と懐徳堂の邂逅
- 第4章 天保期大坂代官の詠歌による交流
- 第5章 懐徳堂による『逸史』の出版
- 第6章 広瀬旭荘による広瀬淡窓『遠思楼詩鈔』初編の出版
—広瀬淡窓・旭荘兄弟の日記を通して—

各章について説明すると、第1章～第3章は、文書とともに書籍を史料として活用した、読者側に焦点を当てる論考である。

第1章では、寛政10年(1798)に公刊、万延元年(1860)まで改板が繰り返された、新町遊廓の遊女名寄『大坂新町遊女名譜つましるし』について、改板の変遷を分析した。改板ごとの情報の変化を分析することにより、不特定多数の読者の質の変化を探った。

第2章・第3章は、大坂の私塾で写本や私家版を利用し、読者を限定して行われた閉じた交流について、論述した。

第2章では、門真三番村の地主豪農であった茨田家に残る蔵書のうち、大塩中斎(平八郎)の著書を分析し、大塩事件に参加し獄死に至った茨田郡士が大塩と関係を深めていく経過が表れていることを示した。

第3章は、天保期に大坂代官を勤めた竹垣直道が懐徳堂教授・並河寒泉から受けた『逸史』・『論語』の出講について検討した。『逸史』は懐徳堂学主の中井竹山が著した徳川家康の一代記であり、当時は写本であった。写本の『逸史』の特徴を明らかにし、竹垣による『逸史』の入手に及ぼした影響を推察した。この『逸史』の入手を含め、大坂に赴任してきた大坂代官が、懐徳堂で学ぶに至る要件や、懐徳堂による出講を求めた理由について論述した。

第4章は、前章でも取り上げた竹垣直道が、詠歌の贈答や歌集の貸借を通じて行った交流について、論述した。

第5章・第6章は、幕末期において漢学塾が著作を公刊する事例を検討するものである。

第5章は、懐徳堂が『逸史』を公刊する事例を取り上げた。『逸史』は寛政11年(1799)の幕府への献上以降、天保13年(1843)の幕府官許、嘉永元年(1848)の公刊まで約50年かかっている。その間、幕府・書肆・懐徳堂の三者が『逸史』をどのように取り扱い、『逸史』がどのような経緯で公刊に至ったかについて、論述した。

第6章は、広瀬旭荘が広瀬淡窓の漢詩集『遠思楼詩鈔』を公刊する事例を取り上げた。広瀬淡窓は九州日田の咸宜園の学主で、旭荘は彼の弟である。地方の文人が漢詩集を公刊する際の、文人や書肆の動向について論述した。